

Japan Geoscience Union Meeting 2011

(May 22-27 2011 at Makuhari, Chiba, Japan)

©2011. Japan Geoscience Union. All Rights Reserved.



HQR023-P03

会場:コンベンションホール

時間:5月24日 14:00-16:30

中央ユーラシア乾燥・半乾燥地域の自然環境と人間活動

Interactions between human activity and natural environment in arid and semi-arid regions in Central Eurasia

渡邊 三津子^{1*}

Mitsuko Watanabe^{1*}

¹ 総合地球環境学研究所

¹RIHN

ユーラシア大陸中央部の大部分は乾燥・半乾燥地域に区分される。しかし、この地域の自然環境は、単に乾いた気候と水資源の希少性に特徴づけられるのではなく、地形など諸々の要因に起因する水資源の多寡・潜在的土壌生産性の高低などの空間的偏りによっても特徴づけられる。水や土壌生産性などの分布に応じて、山岳氷河、森林、草原、沙漠などの景観が出現する。さらに、この空間的偏りは季節や年によっても変動し、これが中央ユーラシアの独特で多様な景観を生み出している。ヒトと自然の関わりの歴史を考えるにあたっては、この地域の自然環境のもと、どのような人間活動が行われ、結果として何が起こったかを明らかにすること、それを環境史として展開させること、の二つが必要である。

一般に、古環境を扱う際には、湖成・海成堆積物コアや樹木年輪、氷コア等、諸々のプロキシデータをもとに、長期の歴史時間軸に沿ってその環境変遷が明らかにされる。一方、人間活動の歴史に関しては、古いものは遺跡等から得られる考古学的情報や、新しいものについては歴史資料などから明らかにされる。現在では、これまで個別に深化を遂げてきた研究分野の枠を超えた総合的研究が志向されるようになってきている。しかし、得られる情報の質や時間スケールの違いに加え、学問分野自体のアプローチ方法や認識の隔たりといった問題は厳然として存在し、総合的解釈には困難をとまなう。

ところで、発表者は、これまでカザフスタン共和国アルマトゥ州のイリ河流域を対象として20世紀以降の開発実態に関する調査を行ってきた。具体的には、アルマトゥ州パンフィロフ地区における種トウモロコシ栽培、エンベクシ・カザフ地区の果樹栽培、バルハシ地区におけるコメ作など、いくつかの農作物を例に挙げながら、その導入の背景としての政策や、実際の開発実態状況について、インタビューや文書調査により明らかにした。

これらは、個別具体例として集落や農業生産組織単位での変遷を明らかにしたものであるが、本報告においては、対象地域における水資源・潜在的土壌生産性の分布が、人間活動に対してどのような可能性を与えているか、あるいは制約を課しているかという点に着目して地域区分を行うとともに、これまで明らかになった情報を地域ごとに整理し、環境可能論的視点からの分析をこころみる。現在を事例として扱いながら、分野を超えた研究と統合するための、ひとつの視点を提示したい。

本研究は、総合地球環境学研究所・研究プロジェクト『民族/国家の交錯と生業変化を軸とした環境史の解明 中央ユーラシア半乾燥域の変遷(代表:窪田順平)』による成果の一部である。

キーワード: 中央ユーラシア, 乾燥・半乾燥地域, 人間活動, 景観, 環境史

Keywords: Central Eurasia, arid and semi-arid regions, human activity, landscape, environmental history